

学生のページ

体験報告

インドでの病院実習を終えて

よしおか まりな
吉岡 万里奈 (医学部第6学年)

平成24年7月8日から2週間、夏休みを利用して、南インドにある Christian Medical University Hospital (CMCH) で実習してきた。6年間の大学生活の中で一番濃い2週間だった。毎日が新しい出会い、発見、衝撃で溢れていた。私がこの体験を通して強く感じたことを述べてみたい。

まずは、何事も挑戦すること。CMCHへの病院実習に申し込む前は不安だらけだった。しかし、6年の夏休みを逃したら二度とこの機会はないかもしれないと思い、行ってみようと思いきや踏み切った。いざ、現地に着いてみると、世界各国から40人ほど医学生が来ていた。どの国の学生もパワフルで圧倒された。国籍、人種、母国語、年齢など関係なく、医学生であるという共通点だけで、どんどん友達の輪が広がっていった。海外の学生の生き方、積極性がとても良い刺激になった。どんなことでも、始める前は心配や不安がある。しかし、挑戦してみて後悔することはないと思う。後輩たちには時間が許す限り、なんでも諦めずに挑戦してほしいと思う。

もうひとつは、当たり前のことに感謝すること。

CMCHは南インドで唯一の大きい病院で、広さは2週間だけでは把握できないほどだった。その広い病院でも満員電車状態の人の多さの待合室、入りきれない人で廊下や病院の外まで人が溢れていた。冷房のない所で文句ひとつ言わずに待っている患者さんたちを見て、海外から来た私たち学生は汗だくで最初はしんどかったが、誰も文句を言えなくなっていた。外来では、患者さんは検査が必要と言われてもお金がないので検査を断る人もいた。病院から寮に帰り、シャワーを浴びようとする、水が出なかった日は何日もあった。トイレも流せないで非常に困った日もあった。扇風機の下で涼んでいると、停電することも頻繁にあった。日本では普通のことが普通でない生活だった。水や電気が常にあること、病院が近くにあり検査が受けられることは恵まれた環境だからこそ、当たり前ではないことを常に意識してこれからは感謝したい。

今回、私はインドでの病院実習だったが、インドに限らずどこの国へどのような目的でもいいので、後輩の皆には学生の間に海外へ行ってもらいたい。日本を出ていろんな人に出会い、様々な価値観、文化に触れてどんなことでも吸収することが、将来医師になっても役立ってくると思う。このような貴重な機会を後押ししてくださった金沢医科大学、支えてくれた家族に心から感謝したい。



オマーン、オーストラリア、イギリスからの医学生と。筆者右端



受診するためのお金がない患者のための出張検診